

維摩經佛國品の原典的解釋(下)

山 口 益

VI

「淨佛國土の行」についての考察

a、次に淨佛國土の行として、「寶積よ、まさに知るべし。直心の土は是れ菩薩の淨土……、深心の土は……、菩提心の土は……、(チベット譯の語調)」云々と説いて、淨土とはさういふ行の行はれる世界が、淨土であるといふ。さういふ行の行はれる世界といふことは、直心についていへば、さういふ世界にある人々は皆直心の人であり、假令、直心と反對な諂心の人であつても、そこへ行けば直心にさせられ、直心といふことに淨められる世界であるの謂である。經文に「諂心なる衆生が其處に生ずる」といふのはその意味である。眞宗では、無量壽佛の淨土に往生するものは、無量壽佛と同體の悟を開くと云つてゐ

るが、そこに生ずれば同體でなくとも同體にさせられるのである。そこに生ずるといふことは、無量壽佛と同じく無量壽にさせられるといふことである。そのやうに無量壽の態に淨めてゆくといふことが淨土であり、今もそれと同じである。但、そのやうに、そこにある程の凡ての人を、直心に淨めてゆくといふことは、能淨者、能化が限りなく自ら諂心を捨てる空の行者でなければならぬ。即ち、佛でなければならぬ。夫故に、經文には「菩薩成、佛するとき直心の衆生その國に來生し、その國にある程の人は直心に淨められてゆく」と説くのである。

b、そのやうに、淨佛國土の種々の行を説き示して、次にそれら諸行を次第して説示する言葉がある。それは注意すべき所説であるから、各本の對象によつて、その原意のあるところを考證し、その原意を把握しなければ

羅什譯

玄奘譯 チベット譯 (説明の上で必要な語だけに原語を入れる)

1

發菩提心 發菩提心
douni-citta
utpada

2

純淨意樂
一意樂
icaya

3

妙善加行
加行
prayoga

4

増上意樂 増上意樂 adhyātśaya

5

止息
思慮
nidhyāpti

6

發起一行
pratipatti

7

pariṇāma

8

方便
寂靜？
upaya

9

清淨有情 國土清淨

10

嚴淨佛土、衆生清淨

11

清淨法教

妙福？
智清淨

12

妙慧
說法清

妙智

妙行——智行清淨

13

一心——自心——自心清淨 svacitta-paricuddhi

14、一切功德淨
〃〃諸妙功德

諸妙功德

經文では「發菩提心のある如くに直心があり、直心のある如くに深心あり」といふやうに展開してゐる。それは發菩提心があれば、そこに自ら直心があり、乃至そこに自心清淨があるといふやうに、始めの發菩提心から最後の功德清淨は自ら次第展轉してゆくのである。茲に菩薩が發心修行を始めて淨土を建て、衆生を救済して建立淨土を完成するといふ淨土の行の過程が述べられてゐる。

各本に夫々若干の出沒があり、解釋し難い點もあるやうではあるが、とにかく解釋の可能な過程を辿つて、その淨土建立の行の過程一般を考へてゆくことにする。

(1) 發菩提心とは、寶積及び五百の長者子が菩提に發趣して、淨土の行を佛に問ふたのであるから、始めに發菩提心があるべきである。什譯にはこれが缺けてゐるけれども、寶積長者子を始めとする五百の長者子の發菩提心を敍べてゐる限り、それが意味の上で缺ける筈がないことは自明である。

(2) 直心を玄奘譯では純淨意樂といふが、これはチベット譯の *bcaya* (阿世耶) と同じであつて、純淨は形容

語であらうと思ふ。ācāya は茲では意志である。意志鞏固であつて、都合のために屈し従ふ諂心のない點で、什譯には直心と表はしたのである。

(3) 意志の鞏固から行、實踐が起る。その場合の行は pratyāsa 加行である。

(4) それによつて意志の鞏固なことがより高められるのを深心といふ。増上意樂なる語がそれを表示してゐる。先の(2)↓(3)の過程の如く、意志堅固によりて實踐は成就してゆくのであるが、この發行から深心への過程は、實踐によつて意志が愈々鞏固に打ち立てられてゆくといふ態である。

(5) かくの如く愈々意志が鞏固になりゆくのであるが、しかしそれは我を強く押し立てるといふ意味ではない。反對に意志鞏固に加行が進められて行けば、そこに其の彼岸に觸れて此岸の行が遮遣せられ、能行所行脱落の境地が見出されてゆく。それが「意調伏」であり、玄奘の所謂「止息」であらう。それは、チベット譯から得られるその梵語は *nidhyāpiti* であるが、それと同じ原語が、本經の菩薩品光嚴童子の下にも見出され、彼處

では羅什譯に於て「伏心〔是道場〕正觀諸法故」といひ、「伏心」の譯語で出されてゐる。註維摩に僧肇がそれを解釋して「心之性也、強梁則觀邪。調伏則觀正也」と言ふ所は、私が直前に述べたやうな意味を能く表明してゐると思ふ。そしてそこに云ふ如く、心調伏に於て諸法が正しく觀じられるのである。雜阿含卷三などに於て度々説かれてゐる所の「內寂其心已如實觀察」である。「正觀諸法」が雜阿含では「如實觀察」である。玄奘譯では「正觀諸法」に相當する語として「如理觀察」と云ふ。諸法の正觀と云ひ、如實觀察と云ひ、如理觀察と云ふ、それは何れも佛陀正覺の本質である緣起の道理が如實に觀察せられる般若波羅蜜なる能所の無二智・無分別智を示すものである。それ故に意調伏といひ止息といふことは、其の彼岸なる般若・慧の實踐を語ることになるであらう。

併し文字に即して、それをより適確に把握せねばならない。蓋し羅什譯の意調伏及び玄奘譯の止息に相當するチベット語として與へられた語は、先にいふ如く *nidhyāpiti* である。この語の當面の意味は philosophical me=

itation, reflexion であるが、この語の語根が *dhya-* なる點よりして、それは *dhya*na(禪定)と同様に使用される語であらうと思ふ。それは *dhya*na にも *meditation*, *reflexion* の用例が先づ與へられてゐるからである。そして禪定 *dhya*na は、菩薩品光嚴童子下では「心調柔」と解釋せられ、慈恩の無垢稱經贊には「寂靜其心……便能調順」などと意味せられるから、その *meditation* と *reflexion* とかいふことは、心の寂靜を意味する。すなはち、それは止 *śamatha* である。然るに止は、觀 *vipaśyanā* と別離には存立しない。止觀は雙行しなければならぬ。先に、「伏心是道場、正觀諸法故」と云つたものは止を述べてゐながら、そこに觀のはたらきを示してゐるのである。禪定波羅蜜を表面に示しながら、禪定波羅蜜と相應する般若波羅蜜をも語つてゐるのである。かくの如く禪定と般若とが止と觀とに相應せしめられて、それが雙行することは度々述べられた所であつて、無著の大乗莊嚴經論波羅蜜品第二五偈にも

禪定と般若との二波羅蜜によつて無分別三昧を成就する。何故なるか。その二によつて止觀雙運の禪定を修

習するからである。禪定は止であり、般若は觀であつて、此によつて最上乘即ち大乘は存立する。

と述べてゐる。入菩提行論第九章の始めにも同様の所説を見る。意調伏、止息が、かくの如き意味を有つのであるから、今もそこに、止を表示し乍ら、實は止觀雙運の無分別三昧を示すものと理解しなければならない。即ち菩薩行としての六波羅蜜を止觀に攝してそこに掲げたものと見らるるであらう。

上來、直心、發行、深心によつて意志堅固の行を説きながら、茲に來つて、その行が不行之行なる波羅蜜として、無分別眞如法界へ通達すべきものであることを謂はんとしたのである。智度論の中に、施戒精進等の前五波羅蜜の五行は般若波羅蜜に攝せられて波羅蜜行となるのであるが、しかし般若波羅蜜もまた施戒等の諸行の階梯を経て發起せらるべきことを説いてゐるのを見るが、茲の發行——深心——意調伏なる過程にもさう云ふことが示されてゐるものと云へるであらう。

(6) しかし、先にも云ふ如く、般若波羅蜜が能所の寂滅なる空眞如に停止してゐることは、眞の眞如法性への

通達としての般若波羅蜜ではなく、眞如法性の覺である能所寂滅の智慧は、限りなく修習 (exercise) せられるのである。それがために出世間から世間へ出で、能所寂滅の空無から能所の有へ出るのである。その修習を茲に行といふ。茲の行とは *prāṇipatti* が原語で、この *prāṇipatti* は二利(大乘莊嚴經論)とも譯される。自利々他の行である。前にも云つたところの、眞如法性出世間の覺證が有情といふ世間へ出で、それによつて有情が眞如法性化せられるから、それは利他であり、さういふことはまた眞如法性の覺證が眞如法性の證としての眞面目を表はし、眞如法性の覺の自己完成であるから自利である。自利利他とは二の事柄でなしに、一の事柄である。覺が覺の眞義を窮はめることが利他になるのである。*prāṇipatti* といふことは、さういふやうに覺が、覺をききめ完成してゆく (to accomplish) ことである。さういふ場合に用ひられるところの行である。故にこの行 (*prāṇipatti*) と先の第三の加行 (*prayoga*) とは、ともに行であつても、その用ひられる位態が異なることを知らねばならない。

(7) この一點からして、菩薩の修行が、有情利益とい

ふ方向に轉換した態に於て語られる。それが回向である。回向 *pariṇāma* とは、to bend down, (その方へ身をかたむける) (to turn aside (側へ向く)) と云ふのが當面の語義である。眞如法性に通達した者が、限りなく能所、我我所を否定する修習を行ふといふことは、我我所にまつはる限り無き有情の我我所が否定せられてゆき、すなはち有情が眞如法性化せられるといふことである。それは眞如法性の功德が有情の方へ身をかたむけ、有情の側へ向ふといふ回向である。それを、眞如法性の證、即ち菩提が十方法界に回向せられることであると云ふ。十方法界の界 (*dhātu*) とは *nine* 鑛脈の意味であつて、そこから金銀等の寶が採掘せられる。有情といふ鑛脈が眞如法性化せられて、そこから功德の寶が得らるる意味に於て十方法界とは十方衆生を措いて他にない。十方衆生に回向せられるとき、眞如法性の覺證が增長廣大になる。回向せられることによつて菩提が大となる。その大菩提たる結果を目的格に取つて大菩提に回向すると云ふのである。

(8) その回向のある如くにまた方便がある。方便 (*upāya*)

ya) とは、「正直を方と云ひ、己れを外にするを便と云ふ」との漢語に基礎を置いた解釋でもよいであらうが、*upāya* すなはち、*upā + i* とは「近づき、到達する」の意味である。また *upāya* なる名詞としての語には、*way, means* と云ふ用例がある。先にいふ如く、眞如法性の空智が有る世間に出て有を眞如法性化することは、眞如法性が有る世間へ近づき到達し、それによつて、有なる世間は眞如法性へ行く道・便^{クヨリ}を得るのである。それが方便である。

(9) 成熟衆生も、上來の過程があるやうに、それがおのづからあり得るのである。回向、方便、成熟衆生といふ過程は、言葉で表はせば三の事柄であるが、清淨世間智がはたらき、それがきはめられてゆく態の他にはない。さういふ態が、回向・方便・成熟衆生といふ言葉の展轉に於て表はされてゆくのである。玄奘譯とチベット譯とが成熟衆生を清淨有情・衆生清淨といふのは、今いふ如く、清淨世間智のはたらきによつて、能所にまつはる有情の能所の執著が破られ、有情が清淨化せられるからである。

(10) 「衆生清淨の如く佛土淨なり」といふが、それは佛教では土即ち器世間といふことも有情を離れては存在してゐないからである。俱舍論世間品の始めにも、欲界諸天等を列擧する次に、「それら器世間と俱なるは欲界なり」と云つて、欲界人が器世間と共に世間として述べられる。法性分別論にも「若し或者が或處に居するとき、彼者及び彼處は依止(*pratisṭhā*)である。それは次第の如く、能依と所依との事體であつて、有情世間と器世間とである」と述べてゐる。者と處となる能依と所依とは別離には存在しないのである。有情は能依であり、器世間なる國土は所依であつて、いまはそれが、「能依が清淨であるならば所依おのづからに清淨となる」と云ふ。そして法性分別論にいふ依止(*pratisṭhā*)とは、そこでは阿頼耶識をいふのであるが、その阿頼耶識が轉依した無分別智法身にあつては、その能依と所依とは、世親の淨土論にいふ所の衆生世間清淨と器世間清淨である。淨土論では、眞實智慧無爲法身が清淨句と譯せられてゐるが、「句」とは *pada* の譯語であり、*pada* は依止(*pratisṭhā*)と同義異語であつて、それを漢譯語の表

示のままだに「言詮の句」と限定するから意味が錯綜するであらう。であるから、淨土論の「清淨句者謂眞實智慧無爲法身故。此清淨有二種。應知何等二種。一者器世間清淨、二者衆生世間清淨」とは、法法性分別論に云ふ依止 (pratiṣṭhā) の轉依せる境地が述べられたのであり、茲の維摩經の (9) ↓ (10) の二項目の次第も同じ位態の事が述べられてゐることは言ふまでもない。法法性分別論は唯識說に立場を取るから、そこでは依止 (pratiṣṭhā = pada) としての阿頼耶識とそれの轉依態としての法身とが説かれるのであるけれども、二種清淨を能依の清淨から所依の清淨へと云ふ能所の清淨なる態だけで述べてもよい。ただ少くとも前項の成熟有情と茲の淨佛國土の項とが淨土論に二種清淨として出されてゐる點からいつて、この二項の如きは、佛身顯現の位態で言へば受用身といふ位態に於て述べられるものである。

(11) 次に「佛土淨なるが如く說法淨である」といふ。

先の如く、衆生清淨と國土清淨とが受用身なる位態に於て述べられるものである限りに於て、その國土清淨の如く說法淨であると云ふことも受用身の位態に於けるもの

であると考へられるかも知れない。それは大乘莊嚴經論菩薩提品^(梵藏本 六一偈)の中にも、受用身の法受用の業として、「大衆の中にあつて或は十地經を説き、或は入楞伽經を説き、或は般若經を説く」ことが示されてゐるからである。けれどもまた菩薩提品^(六二偈)には、「その說法は甚深なる大乘法を説くものである」とも云ひ、またそのことを「地に入れる菩薩大衆の中にあつて不共なる大乘法を受用するものである」となし、そしてそれは受用身の自利圓滿であつて、利他圓滿は變化身として闍浮提等に於て法輪を轉ずるのである^(六三偈)とも云ふ。であるから茲の說法淨は寧ろ化身の位態に於けるものであり、まさしく我々が教法を聽聞して我々衆生の能所、我我所が破られることである。說法が我々を清淨にする作用のことである。

(12) 次に「說法が清淨化する如く、そこには智が清淨化するのである」といふ。智の清淨とはまさしく清淨世

間智のはたらきである。眞如法性が我々に到り届く淨法界等流なる說法の清淨化は、とりもなほさず清淨世間智のはたらきであるからである。羅什譯はそれを智慧淨と

云つてゐるけれども、もともと羅什の譯には慧(般若・prajña)と智(若那・jñāna)との使ひ分けが明瞭でないものがある。清淨世間智のはたらきは出世間慧ではなく、能所の態を以て世間にはたらく智であることが明示せられねばならない。チベット譯には說法清淨と智清淨とを次第顛換してゐる跡があつて、いまいふ如き理解を困難ならしめる嫌はあるけれども、茲の羅什譯の智慧淨はチベット譯の示す如く、智清淨でなければならぬと思ふ。

なほチベット譯に智行清淨(jñāna-pratipatti-pariuddhi)と云ふ一項が出てゐるのは、清淨世間智がかくの如く完成してゆくことを別に取り立てて述べるものである。何故なれば、いま「智行」といふ場合の行(pratipatti)には、「成就してゆく」の意味があり、清淨世間智のその分位に於て、智が智としての成就の意味があるかぎり、そのことがまた、清淨にしてゆくことであるからである。玄奘譯に、清淨妙行と云ふ一項のあるのもそれと同じであらう。

(13) かくの如く、智が清淨化することと、即ち我々の能所が打ち破られることが完成した態とは、とりも直ほ

さず我々の心が清められることである。羅什譯が唯、心淨と云つてゐるのに對し、玄奘譯とチベット譯とが「自らの心淨」と云つてゐるのは、佛が對告衆に對して、「御身自らの心が清まることである」と、述べてゐる意味でないかと思ふ。かくの如く清淨世間智のはたらきによつて我々の能所の執が破られて心が清められる。それによつて佛國土建立の完成があるのであるから、それを次に

(14) 一切功德淨と云つたのであらう。佛國土の清淨とは、結局、菩薩の淨佛國土の完成によつて我々の能所が寂滅せしめられ、即ち心が清められることに於て窮はまるのである。それ故に、この(14)一切功德清淨は、チベット譯の如く、それがなくとも意味は通じる。次の經文に、「若し菩薩淨土を得んと欲せば當にその心を淨むべし。その心淨きに隨つて佛土淨なり」と云つて、心の淨によつて佛土の清淨の限界を述べてゐるものがそれである。すなはち、淨土の行としては、發菩提心直心云々と行の系列が展開するのであるけれども、要は菩提に發趣した御身等菩薩に於て心の淨まること、そこに佛土の清淨があり淨土の建立があると云ふのである。

以上十四項の系列は、羅什譯所出のものが最も次第順序が整ふてゐると見られる。チベット譯それに次ぎ玄奘譯には、他本にない項目が入り込んでをり、若し強いて會通しようとするれば更に若干の勞作を必要とするであらう。今は一應羅什譯に従つてそれを理解することに力めたのである。

私が少しく眞宗教義的に理解しすぎてゐるのでないかとも思ふが、かういふ淨土建立の行として次第系列的に述べられた跡を見ると次のやうに理解せられる。すなはち、直心發行深心といふ始めの方を見ると、云何にも菩提に心を發した寶積童子たちが、菩薩淨土の行としてそれらの行を行はねばならぬやうに見える。ところが段々にその行が進んで系列が展開した跡から見ると、それらの行は既に佛の方で先に作されてあつて、寶積童子たちとしては、それらの行の結果として現はれて來た釋尊の説法を聞いて、それによつて心が淨められるならば、それによつて佛國土の完成があると。さう云ふことが述べられてゐるやうに思へる。要は、釋尊の説法を聞いて心が清淨化せられる。そこに佛國土は顯現する。さういふ

佛教的世界が佛國土であると、さういふことが言はれてゐるやうに思へる。

さういふことは次にももう少し述べることであらう。

c さて佛土清淨の限界として述べられた「心淨(*citta-pariṇuddhi*)」といふ、心とは所謂 *citta* (質多・集起心)であつて、傳統的に心は識よりも根本的なはたらきあるものとせられてゐる。所謂、雜阿含三十六「心能導世間 心能遍攝受 如是心一法 皆自在隨行」(俱舍論卷三、二右引用)といふ心である。そして心淨については雜阿含卷十(藏二六九頁)にも「心淨なれば衆生淨(*citta-vodana satta visujjhanṭi*)」といふやうな語があり、心淨といふことが一の *idion* とせられてゐる形態が見られるやうである。雜阿含の心淨は *citta-vodana*、即ち梵語の *citta-vyavahāra* である。*vyavahāra* は雜染清淨といふときの雜染(*samkleśa*)に對する清淨であり、「雜染」が、能所の執によつて我々の存在が逼惱せられてゆくことであるのに對し、清淨(*vyavahāra*)は能所の執の遮遣によつて淨められてゆくことである。また茲の維摩經文の「若菩薩

欲得淨土、當淨其心」と云ふときの「淨」の語は、チベットの譯からは「parikarman」と還元せられる語で、それは他の漢譯では「治淨」と譯せられることもあり、means of purifying the mind (Apte, S. E. D.) と云ふ用例のある語である。また七佛通戒偈に「自淨其意」(sva-citta-paridamanam) と云ふときの「淨」(paridamanam) の語は、當面の意味は、瑜伽師地論卷十九の引用では「自調伏其心」とも譯せられてゐるやうに、「調伏」であるけれども、それにまた to be tranquilized の用例があつて、それも空寂から流出するところの清淨であることは言ふまでもない。そのやうに、「心淨」には citta-pariguddhi, citta-vyavadāna, citta-parikarman, citta-paridamanam 等の原語が枚擧せられるが、なほそれと同じ意味の形に citta-prasāda の語があることに注意すべきである。この citta-prasāda は提婆の四百論第五章「菩薩行の説示」に於ては、菩薩行の本質として示される。然るにその praśāda は、俱舍論に「信は心を澄淨ならしむ」(Graddhā cetasaṃ prasadaṃ) と云ふ「澄淨ならしむ」であり、その心の澄淨が信 (Graddhā) の内容である。そしてその

praśāda は大無量壽經梵文の所謂十八願成就文に當る個處に「*adhyāṣayena praśāda-saṃgatena cittam utpādayanti* 澄淨、明淨を伴へる深心を以て心を生起せしむ」といふ praśāda であり、大無量壽經の異譯・無量壽如來會の言ふ「一念淨信」である。そこでさういふやうに語を列擧して研究してゆくと、眞宗教義に於て諒解せらるる大無量壽經十八願成就とは、如來方便の智のきよめるはたらきが我々に到り届いて、我々の心がきよまり、すなはち自力を離れた相であるが、いま云ふ如く、維摩經の茲の場合も同じであると云ふことになる。すなはち、眞如の覺證が我々世間にはたらき來つて、清淨世間智によつて我々の心が淨められ、それによつて淨佛國土の成立の規定せられるのが、維摩經の佛國土の建設であるが、大經の十八願成就も、佛の智慧力によつて我々が自力心を離れた淨信を起し、それによつて往生する。我々の往生によつて如來の淨土建立の本願は満足して、不取正覺の誓願が圓滿するのである。何れも心淨に於て、佛國土建立の完成が期せられてゐるのである。

ところで注意すべきはその大無量壽經十八願成就文の

その場所に、「一心の發起なりとも、淨信と俱行せる増上意樂(深心)を以て、その心を發起せん」(ekacittatūpādānam apy' adhyāgāyena prasāda-sahagatena cittam utpādayanti)とあつて、一念の發心が、淨信と俱行せる増上意樂(深心)によつて發起せられると云ふことである。即ち、その場合の「發心」の「心」とは淨信を依因とするのである。そして adhyāgāya とは、先の維摩經の菩薩の淨土の行の第四に枚舉せられたもので直心↓發行↓深心といふやうに、直心發行から次第に展開したものである。そこで大無量壽經のその文章と併はせてみると、最後に擧げられた我々の心が澄淨ならしめられると云ふ我々の許に於ての心淨は、菩薩行の許に於ける深心と同じ内容のものであると云ふことになる。

さういふやうに、維摩經に於ける淨土の行の語を、大無量壽經十八願成就文に見らるる信の内容に相應せしめるならば、維摩經のそれが、眞宗の宗學の云ふ、「我々の許に於て發起せらるる一念の淨信は、法藏因位に於ける菩提心の等流に於て得らるるものであり、我々が一念

の淨信を發起する所にて法藏の願行が我々のものとせらるる」といふものと、同じ内容のことを謂はうとするところの「心淨」が、菩薩の發菩提心下に云はれる所の「深心」と同じ價值にあるといふことに於て、その深心と云ふべきところを、提婆の四百觀論第五章「菩薩行の説示」の如く「心淨」の語で表はしてよいわけである。經文の次の條下に

爾時舍利弗承佛威神、作是念。若菩薩心淨、則佛土淨者、我世尊本爲菩薩時、意豈不淨、而是佛土不淨若此。

と說かれるものはそれを表示してゐる。

かくして、維摩經の淨土の行と、無量壽經のそれとは、如是我聞として受領せられた受領のされ方、すなはち經典の表現形式に於て、差異があるのではあらうけれども、淨土建立の意圖に於ては、同じものが動いてゐるのではないであらうか。

V

經文ではいま直前に引用した如く、次に舍利弗が、世尊

に對して、「若し菩薩の心が清淨なる如くに佛土が清淨であるならば、世尊釋迦牟尼が菩薩の行を行じたとき、世尊の心は清淨でなかつたのであるか。若し清淨であつたとしたならば、現實の佛土が今見らるる如く不淨に顯現してゐるのは云何なる事情によるのであるか」と問ふ。そして世尊は「これは盲人が日月を見ないが如く、佛の咎ではなくして衆生罪垢の咎である」と答へる。なほそれに續く螺髮梵士と舍利弗との問答に於て、螺髮梵士は、舍利弗に對して、「佛土を不淨と見るのは、心に高下があり、佛智に對して意樂(Ēcāya)が不淨に決定してゐるからである。若し有情に對して心が平等であり、佛智に對して意樂が清淨であるときには、佛土の清淨を見るのである」と云ふ。

佛弟子中の智慧第一と稱せらるる舍利弗との間に、さう云ふ問答の取換はされるところに意味がある。智慧第一といふ智慧が、どういふ智慧であるかは後に明らかにするが、少くとも淨土は心淨(citta-prasāda)の前に表はれる世界であり、citta-prasāda は、心空であり、それはすなはち論理的な思慮分別の絶した心地を示すときに

用ふる語である(『月稱中論釋』)。prasāda は先の無量壽經の十八願成就文に於ても、深心(ādhyātmya; 勝意樂)と俱にある深心の一のあり方とせられるが、さういふやうにこの深心が信(śraddhā)の内容である限りに於て、この深心はまた adhimukti (信・信解・願樂)と同じく用ひられる。そしてこの adhimukti は、究竟一乘寶性論に於ては度々不可思惟不可分別なる空眞如を了承する心事を表はす爲に用ひられる語である。十住毘婆沙論に「信・樂・空法」の語が度々見出されるのもそれである。さういふ用語例から知らるる如く、心淨に於て佛土の淨が見られると云ふことは、能所の分別心すなはち自力のはからひを離れた處に淨土が見らるるの意味であつて、さういふ淨土のあり方が智慧第一の舍利弗によつては證入し得ないとなすのである。螺髮梵士の語の中に云ふ「心に高下あつて不平等である」と云ふ高下といふことも、それは増益(samāropa)と損減(apavāda)・すなはち、現に無なるものを有りとし(高)・有なるものを無しとする(下)有無の分別であつて、さういふ分別がある限り意樂(Ēcāya)が清淨でなく、そこに淨土は觀見せられないの謂である。

入楞伽經などによると、外教の徒と小乗人とは實有思想に執はれた究理論者(*śāstra*)であると貶せられる語を屢々見ることであるが、智慧第一の舍利弗でも佛の世界を知り得ないと謂はふとする茲の所説には、智慧が云何に第一でも所謂分別實有執に執はれた論理主義者としての小乗人では、能所の分別を捨離した心淨の境地には達し得ない。寧ろ、さういふ智慧は第一であればある程、佛智の世界に證入し得ないと謂はんとするのである。

そこで經文の次に、佛が足指を以て地を按じ給ふに三千大千世界が佛土となつて、舍利弗も佛土の嚴淨なるを觀見したといふ不可思議な事柄・奇跡を敘述してゐる。それは舍利弗が、淨土を以て分別心の能く證入する境地でなく、不可思惟不可分別である、と信解したことを、不可思議な事柄・奇跡を以て表示するのであらう。佛教では奇跡は不可思惟性を、不可思惟性として承受したことを表はすのである。そして經文に佛が、「かくの如く淨土が觀見せられるのに下劣人を度する爲に現前には衆惡の穢土を示してゐるのである」と述べてゐるのは、淨土といふものは、穢土を超越し別離した清淨なる土の意

味ではなくして、いま舍利弗が淨土を信解するに至つた如く、現に下劣人を信解せしめ、下劣人の能所の分別を破析し、穢土人を淨化する清淨世間智のはたらく境地であることを語るのである。

淨土教に於ては、釋迦佛が五濁の穢土に出世し、彌陀の本願海を開説し、それによつて有情の無明の闇が破られること、すなはち有情の淨化に於て、本願の成就満足することを説いてゐるが、維摩經の茲の語にも、舍利弗が不淨の穢土にあつて、心淨の境地に證入する處に、土の清淨化するなほち淨土の意味があることを述べてゐる。そこには同様な意圖の動いてゐることが注意せらるるであらう。そして淨土の阿彌陀經には舍利弗が對告衆として選ばれて、淨土の完成が宣言せられ、その淨土の完成はこの五濁惡世に釋迦牟尼佛が出世して難信(*vipratyaya-niya*)の法を説いたことに於て證明せられてゐることを述べるのであるが、それは、智慧第一の舍利弗について清淨化のはたらきを現に説示して、淨土の具現を開説した茲の維摩經と同じ意圖を含むものでないか。難信(*vipratyayanīya*)といふことは、實有執にある(四六頁)